

「措置法」先取りの東工大キャンパス

教授会の少数意見・13

村

田

浩

七月一〇日早朝、東工大・大岡山キャンパス正門のパリケードは、機動隊によつてまたたく間に取除かれ、大学の周囲には高さ三尺の鉄板が張りめぐらされた。

この機動隊導入と長期間のロックアウトは、「内ゲバにより生命の危険が生じた」という安手のヒューマニズムに訴える大義名分や「全学集会」というおきまりの儀式すらなかつたために、多くの教授会メンバーにとってすら全く寝耳に水の出来事だつた。それから一ヶ月たつた今、まだ自由に出入りの出来ないキャンパスはくまなく「掃除」されて、人間不在のためあらざることなく、一面に生えそろつた芝生の中に白い立札がやけに目につくようになつた。立札の多くは「許可なく構内にどどまることを禁ず」といふものであるが、それにまじつて次のよう七・一八告示が立てられている。

告本学構内における次の事項を禁ずる
一、研究、教育その他公務妨害

二、いっさいの不法行為
(面会、討論の強要……など)

三、当分の間ににおける次の事項

(1) 許可された時間外の構内残留

(2) 立看板、立札

(3) 所定の場所以外における貼札、ビラく

ばり

(4) 許可された条件以外の拡声機の使用お

よび騒音の発生

(5) 講義室、会議室、講堂の無断使用

(6) フォモ、その他これらに類する行為

これは文部省すら「法案」に盛りこむことを断念した禁止事項を含んでおり、

「大学措置法」はまさにかく実施されるのだといふことを如実に示したものといふ。

例にも見られるごとく察問題に端を発し

た。大学当局は新寮建設予算の請求に當つて、学生諸君に對して「實際上は覺書

(裏規約)によつて運営するから、文部省への(○管規なみ)寮規則提出を認めた」とせまつた。この「裏規約線」

自規制路線はすでに破綻したものであつたし、なによりもまず、大学当局は

このような権力迎合的体質を根本的に変革することを求められたにもかかわらず、そのための団交に応じようとせず、

一、○管規完全白紙撤廃表明を要求する

二、向岳新寮建設を確約せよ

三、一・二五学長声明白紙撤回を要求する

四、学生のスト、團交権を認めよ

五、以上四項目を大衆團交の場で確約せよ

なつてきた。東工大闘争は半年にして、もはや引返すことの出来ない地点まで達したといえよう。

東工大闘争は、他にくつかの大學生たちとなりしたのであるが、一・二五学長声明によつて、それらはすべて反古にされ、團交は決裂した。

このような大學当局に対する怒りは、一・二九学生大会においてチエックボイントつきの無期限ストライキという表現によって、學生諸君に對して「實際上は覺書(裏規約)によつて運営するから、文部省への(○管規なみ)寮規則提出を認めた」とせまつた。この「裏規約線」

じてきた。この「團交」において、學生諸君はいくつかの學長の自己批判書を勝ちとつたりしたのであるが、一・二五学長声明によつて、それらはすべて反古にされ、團交は決裂した。

このような大學当局に対する怒りは、一・二九学生大会においてチエックボイントつきの無期限ストライキという表現によって、學生諸君に對して「實際上は覺書(裏規約)によつて運営するから、文部省への(○管規なみ)寮規則提出を認めた」とせまつた。この「裏規約線」

一、○管規完全白紙撤廃表明を要求する

二、向岳新寮建設を確約せよ

三、一・二五学長声明白紙撤回を要求する

四、学生のスト、團交権を認めよ

五、以上四項目を大衆團交の場で確約せよ

これに対しても、根本的体質の変革をしたくない大學側には、學生対策的に対応する以外に道は残されていなかつた。すなわち文部省が認めてくれる線で學生側を納得させねばならないが、團交に応ぜよるわけにはいかない。そこで學生の怒り

を諒め、分断するために、スト体制のチ
エックボイント（団交要求の出ている日
で週一度）近くになると「文書」を全学

生に送りつけるという手段をとった。

その中に、二月一日付学長名での「全
学生諸君へ」という「二・一パンフ」が
あった。これこそ、基本的には大学側が
五項目要求に対して「答えた」最初にし
て最後のものといえるものだった。

二・一パンフによつて、大学側は五項
目中はじめの三項目の要求はのんだとい
い、スト権、団交権については手続き上
のことを長々と書きつづって言葉をこぎ
とした。しかしながら、実際には、三項目
についても納得のゆく説明はなされてい
ない。たとえば、「○管規完全白紙撤廃
を声明した」といつても、新聞記者会見
において、学長が、学生が騒ぐから「文
部省に撤回を要望した」といつただけ
で、なぜ○管規が悪いのか何も書いてな
いのである。五項目要求は、本来、単なる
要求項目としてあつたのではなく、全
体として答えられなければならないもの
としてあつたのである。

その上、このパンフは新日本文に属する
「進歩的文化人」が起草したといわれる
だけあって、学生にこびるような甘つた
る文章でつづられていた。

少くとも私は、本学の現在と将来を憂え
る全学生諸君の純粋な情熱の高まりが、そ
の表われ方こそ時に穏当を欠くものがあつ
たとはいひ、学長としての私を含めて全教
職員の窮屈問題、広くは大学問題への関心を

高めさせ、その認識を深化させた大きな原
動力であったことを否定しない。

といった具合である。

中学生的対応

一・二五学長声明の舌の根も乾かぬう
ちに、このような調子で「向岳新寮を完
全自治寮として建設することを確約しま
す」といつたところで、だれが信用でき
るというのだろうか。学生諸君は活字で
表わしたものではなく、肉体に宿つた思
想を求めていたのである。したがつて、
「これでよい」と確信していた多くの教
授会メンバーの予想に反して、二・一パン
フは学生の間に動搖すらひき起さなか
つたのである。

たび重なる団交拒否通告に抗議して、
二月一二日、闘う学生の組織である全學
闘争委員会（全闘委）は正門と南門にバ
リケードを構築し、「大衆団交に応じな
い教官（教授会メンバー）は学内立入り
を認めない」と宣言した。このバリケー
ド闘争によつて、五項目要求は全大学構
成員に対してつきつけられたものとなつ
てきた。

一方、大学側の闘争分断収拾策動は、
このバリケード・アレルギーも加わつ
て、いつとき、成功するかに見えたので
あるが、社民的改革路線をかかげる全學
改革推進会議（革推会）が右翼秩序派学
生を結集したにとどまつた。

バリケードによつて大岡山キャンパス
をしめ出された大学側は幾度か収拾策動

に奔走したのであるが、その
度に粉砕されてしまった。一方、学生側も四・二八を頂点
とする街頭行動と学園闘争を
結びつけることができず低迷
していた。

大学側は学生諸君の問い合わせ
に対する對していつこうに答えるよ
うとはせず、おおむね無為無
策で日を送っていたのである。



夏の話題をさらう生ビール

日付け入りアサヒビール本生

「政治学」によって貫かれている。彼に

したものであつて、肝心なところが意見
の併記になつていて、今後の議論
の单なる「たたき台」でしかないと言わ
れていたが、われわれはこれが大学の今
後を決定する重要な方向選択を行なつて
いることを見抜いた。

五月六日から五日間にわたつて、われ
われは「東京工大改革原案批判全學集
会」を開催した。これは、各層の闘う部
分を結集している「全闘委」「大學院闘
争委員会（院闘委）」とわれわれの「全學
助手ゼミグループ（助手ゼミ）」の共催
で、大学側（一二三人委員とその他理工系
教授）を追及するという形で行われた。
この「改革案」は「政治的に成熟した
者」、そのような「専門バカ」を生み出

る点は「大学の目的は研究、教育ならびに
これらと関連した社会、文化への貢献で
ある」という「中学生」的作文で事な
りとしているのである。

東工大闘争によつて問われてきたこと
は、権力に迎合し自主規制を行なつてい
る大学当局、自分の行なつてきることとの
社会的意味も考へずにただひたすら「研
究」のみをやつてきた自閉症的「研究
者」、そのような「専門バカ」を生み出

してきた「研究」、「教育」とはいったいなんであつたのかということがあるにしかわらず、それをたつた二行の作文は近代化、合理化によって闘争を收拾させてしまおうとする大学当局の意図を見ぬくことが出来る。

倒錯した「改革案」

われわれは現時点で改革案なるものがあり得るとすれば、それは「一、東工大闘争の問題提起をどのように把握した」が故に、どのように自己批判し、いかなる視点に立ち、「二、これをどのように克服」しようとしているのかをこそ問わねばならない、と考えた。この追及により、教授会メンバーは一人として闘争の提起した問題を真に自己の問題としてとらえていないことが大衆的に明らかになつた。

たとえば、○管規のもつ政治的意図をどうしても見ぬけず、「○管規の背景は教育ママだ」という成熟した「政治学者」や、体制化された科学が必然的に「専門バカ」を生み出すのだというと「専門バカは他人のことだ」と思う「文學者」や「専門バカと呼ばることを光榮に思つてゐる実用主義」者である工学部教授らは、大學と自動車学校の違いを二日がかりで述べたのであるが、ついにだれも納得させることができなかつたりした。他の教授は、「この改革案と、提起されている問題とは無関係である」と

言ひきるのだ。それではなぜ「改革案」

題が一段と深化されていった。

を出していたのか。

「東工大改革案」はまったく逆転した思考法によつて出てきた。それはまず五項目要求の思想性への正面きつての対応を避け、字面だけの回答を考え、それを合理化しようとする苦悶の末に「連合体」論を根幹とする「基本方針」が出てきて、それから「現状の総点検運動」を行うといふのだ。さらに、この「基本方針」自体が逆から読むと意図が明確になるのである。

つまり、まず学生をいかにして規制してゆくかが詳しく述べてあるが、現行法体系を全面的に適用して「調整」と「規制」を行うためには、大学を完全に市民社会化しなければならない。そのためには「連合体論」がよい。そして最後に、すなわち冒頭に、前述の「大学の目的」を持ってきて形を整える——たゞボ的研究者あがりの東工大執行部は、このようにして問題を管理・運営の合理化に取り組み、闘争を收拾しようとしたのだ。

一方、連合体論は、大学共同体論を幻想するとしてしりぞけ、現状を積極的に肯定することによって居直り、さらに永続的告発者たり得る学生を教授会(＝大学)の自治から切捨ることによつて、教授の既得権を守りぬこうとするものであり、まさに「学生切捨て教授居直り論」である。このような批判は理学部助手会の声明としても発表され、各層、各学科別の集会の中にも持込まれて、問

ついで、新執行部に移つてから、大学側は四項目の「改革案」を教授会に提出した、それは、「一、教官の自己規制について。二、議事録の公開について。三、学生室の新設について。四、学部のカリキュラム改革について」というもの

で、三の学生室とは「学生が希望や苦情を申入れる明確な窓口」であるが、これは四とあわせて、大学側が問題をどうとらえているかを知る資料となるものであるが、問題は「一、教官の自己規制」である。連合体の構成要素内の自己規制を言うには、まず自分たちから行おうといふわけだろうが、委員会を設置して研究、教育の業績審査を行い、辞職勧告までやろうとするもので、これが後は「連合体論」がよい。そして最後に、すなわち冒頭に、前述の「大学の目的」を持ってきて形を整える——たゞボ的研究者あがりの東工大執行部は、このようにして問題を管理・運営の合理化に取り組み、闘争を收拾しようとしたのだ。

五月八日、大学当局の期待を一身に集めて、革推会をはじめとする「野合三派連合」によつて「デッヂあげ学生大会」が開かれようとしていた。しかしながら、全く問題に正面から取組もうとせず、もっぱらスト取扱のみを行おうとする策動は成功するはずがなかつた。全園委・院園委に結集する諸君の実力行使により粉碎され、斯波学長は辞任に追いこまれた。さらに革推会が空中分解した上に、新執行体制も固まらず、大学側は無為無策のうちに日を送つていた。

一方、このよな中で、五・八粉碎行動に加わった院生に対し、教授が研究室追放を申渡すという「野村研問題」が起つた。これは、現行の大学院制度、学生を研究の道具としてしか考えていない教授の本質を暴露するものとして、院園委を中心として追及集会が開かれたりしたのであるが、当の野村教授の出席が得られなかつたり、問題が学園闘争の本質と直接かかわりをもつだけに未解決のままになつてゐる。

六月に入つて加藤(学長代行)執行部

が確立し、七月授業再開をめざして策動を開始した。まず執行部のうち、人文系を中心とする「ハト派」が前面に出て、院生などの申入れを逆手にとつて「討論集会」に応じながら、他方が、学生の「自主講座」に教官が積極的に介入して作用するのである。

收拾策動の最後的破綻

五月八日、大学当局の期待を一身に集めて、革推会をはじめとする「野合三派連合」によつて「デッヂあげ学生大会」が開かれようとしていた。しかしながら、全く問題に正面から取組もうとせず、もっぱらスト取扱のみを行おうとする策動は成功するはずがなかつた。全園委・院園委に結集する諸君の実力行使により粉碎され、斯波学長は辞任に追いこまれた。さらに革推会が空中分解した上に、新執行体制も固まらず、大学側は無為無策のうちに日を送つていた。

一方、六・一五反安保統一行動には学園闘争を纏つて広範な層を結集し、この既存政党をはるかに超越えた大統一運動の熱氣はそのままキヤンバスに持ち込まれて、大衆の一大決起を生み出した。大学立法粉碎、東工大闘争勝利のスローガンによる六・二七、千人のデモの成功たらした。全園委、院園委、助手ゼミと

東京港区南麻布2-8-4
振替・東京95814

日本僻地の史的研究

上卷

森嘉兵衛著
五〇〇〇円

僻地の学問的研究に半生をかけたる本書は、研究史上未開拓の岩谷正義に焦点をあて、膨大な原資料を整理して完成された画期的研究である。

いう闘う組織を中心として構成した実行委員会の旗の下に、かつてない結集を得て、東工大単独で「文部省・国会アモ」を勝ちとれたという事実は、新たな闘争の出発になり得るものであつたし、それだからこそ、大学執行部を震撼させるものであつた。

バスから、再度しめ出すに及んで、当局の七月授業再開のもくろみは打ちくだかれた。全闘委、院闘委の諸君は、大学側はもしかしたら、まだ団交に応してくるかもしれない、というかすかな希望を持つてバリケードを強化したのであるが、この期待も微塵に打ちくだかれてしまつた。

東工大における機動隊導入は、前述の
ように、「一切の粉飾を加えず、「大学
の機能の阻害」というそのものばりの
理由で行われた。このことからも、自閉
症的「自然科學者」あがりの現執行部の微
底した合理主義をみることが出来よう。
現在、学内は執行部独裁体制下にお
り、教授会は、その構成員さえ公然と認

自閉症的獨裁体制

く見せて下さい。あまり抵抗すると機関
隊を呼びますよ」とか、「私は君を知
てるけど、知らない人もいるんだから
くせをつけていただくために見せて下さ
い」とかいう教授まで出てきた。そのと
ちに、「大学は論理の場ではない」とい
う、前教務部長の「主張」が漫透してき
て、「理由は言う必要はない、規則で士
から……」一点ぱりに落ちぶれてしまっ

「やむをえない」といながら、多数頗見知りの教授が検問を行なつてゐる。われわれは、学内での抗議行動を行なつてゐるためにそこを通るのだが、「なぜ身分証明書を見せる必要があるのか」と詰問すと、彼らには「やむをえない」といううるさい外に「名答」はうかんでこない。そこで「バカでもチヨンでもよいから、とにかく見て下さい。あまり抵抗すると機関と
り下がり、機動隊導入の追認すら行わないうちに、ロックアウト体制維持に面的に協力している。

たのも当然である。

大学当局は機動隊導入によつて、数千万円ものカネをかけて、大学解体の第一歩を踏出した。理工学部特有の徒弟制度、「むらの人に關係」は崩壊した。断絶は深い。もう元に戻ることはないであろう。つぎにくるものは近代化、合理化以外にない。しかしながら、それはなんら、問題の解決を与えないばかりか、われわれが告発してきた権力に迎合する、没主体的、無論理的、自閉症的「研究者」、専門バカを大量生産するだけである。

われわれは九月からの鬭争によつて、この死臭に満ちたキャンバスを新たな論理の場にしてゆかねばならない。

トルコと日本の間

鴨沢
巖著

トルゴの人のびとの精神、生活、社会、経済等を、日本との比較を通じて考察しその間違のながりを探ろうとする。開発途上にあるこの興味がかかる。経済地理学者が、エリモアを繕りませぬながら鋭く洞察するこの興味がかかるといふ。

近世漂流記集

集

朝日ジャーナル